

ある 3-methoxy-4-hydroxyphenylglycol (MHPG) 量も有意に増加させた。

考察：歯間離開処置後、記憶能力の低下と神経終末より遊離されたノルアドレナリン量を反映する MHPG 量の増加とが同時に発現したことより、歯間離開処置は中枢ノルアドレナリン神経に対する選択的なストレスラーとして作用し、マウスの記憶機能に対して影響を及ぼしたと考えられる。

結論：歯間離開処置により生じるストレスは、強度が高い場合には、記憶機能に対して一時的な影響を及ぼす可能性がある。また歯間離開処置の影響が短期間で消失したことより、離開処置により発現するストレスは、適応しやすいタイプの慢性ストレスであると推定される。

#### 演題 4. 臨床研修歯科医師に対する総合的評価の試み

○岸 光男, 青村 知幸, 斉藤 亮,  
佐藤 仁, 中島 薫, 古内 秀幸,  
森岡 尚, 八重柏 隆, 三浦 廣行,  
石橋 寛二

岩手医科大学歯学部  
歯科医師臨床研修カリキュラム運営委員会

目的：歯科医師臨床研修の研修医評価において、評価項目や評価者により生じる評価得点分布の差を標準化し、総合的評価指標を作成すること、また、研修中の講義形式の研修（講義）の有効性を検討することを目的とした。

対象と方法：平成14年度岩手医科大学歯学部附属病院において歯科医師臨床研修プログラムを履修した者28名を対象とした。講義前後に行われた客観テスト得点と実地訓練中に行われた行動評価のためのチェックリスト得点を分析した。研修項目間の評価点数の分布を標準化するため偏差得点を算出した。その後、チェックリストによる評価が行われたすべての研修項目をパラメータに組み込んだレーダーチャートを研修医ごとに作成して総合評価指標とした。また、講義と客観テストを行った研修項目について、客観テスト得点とチェックリスト得点の相関係数を算出し、それらの関連を分析した。

結果：レーダーチャート作成により、各研修医の臨床能力の偏りを視覚的に把握することが可能となった。客観テストとチェックリスト得点の相関は抜歯の講義後のテストとその後の実地訓練 ( $r=0.406$ ,  $p=0.004$ ),

歯周疾患治療に関する講義後のテストと保健指導のロールプレイ研修 ( $r=0.488$ ,  $p=0.015$ ) で有意に高い相関が認められた。

考察：レーダーチャートによる評価の有用性を高めるには今後評価項目の統一化とチャート上での項目配列の妥当性を検討する必要があると考えられた。講義と実地研修の評価に関連がなかった項目については今後それらの連携を検討する必要性が示唆された。また、これら評価を研修期間中に、研修医、指導医の両方にフィードバックするシステムが必要と考えられた。

結論：レーダーチャート作成は臨床研修歯科医師の総合的評価の一助になると考えられた。また、臨床研修期間中の講義は項目によっては実地訓練に反映されることが示された。

#### 演題 5. 高濃度局所麻酔薬の神経ブロックへの応用

○鍋島 謙一, 戸塚 淳子, 根本 光  
坂本 望, 佐藤 雅仁, 城 茂治

岩手医科大学歯学部歯科麻酔学講座

目的：高濃度局所麻酔薬は、その不可逆的な神経破壊作用により神経遮断薬として用いられている。当科でも、10%リドカインを神経ブロックに用いており、その有用性について、アルコールブロックと比較、検討を行った。

方法：当科で神経ブロックを行った患者について、神経ブロック後次のブロックまでの期間（有効期間）、ブロック後の、pain の状態、paresthesia の有無、allodynia の有無などを比較検討した。更に、このうちの2例について、症例を供覧し考察を加える。

結果：ブロックの平均有効期間は、10%リドカインで321日、アルコールで267日であった。また、アルコールでは刺入時の疼痛、術後のparesthesia, allodynia が出現したが、10%リドカインでは見られなかった。考察：神経ブロックにおける10%リドカインとアルコールとの比較を行った。アルコールでは、ブロック後にparesthesia, allodynia 等が現れたが、高濃度局所麻酔薬ではこれらの副作用が軽減される可能性がある。

結論：高濃度局所麻酔薬は神経破壊薬として有用と考えられた。